

専門部会の役割と今後の進め方について

委員長 北原和夫

2007/05/09

現在、それぞれの部会で「科学技術の智」は何かについて、真剣な議論がなされています。議論の方向性についてコメントします。

項目の羅列ではなく知の全体像を

各部会でまとめて頂く報告書では、国民が身につけておくべき知識、技量、考え方を羅列するのではなく、それらを関連させて、知識全体の構造が見える形で表現して頂きたいと思います。これまでの学習指導要領を巡る教育の議論では、ややもすると、教育内容の個々の項目を教材として採用するかどうかに議論が集中して、科学とは何か、科学の方法は何か、ということをも明らかにしようとする議論は少なかったのではないかと思います。過去において、教えるべき生物の種類をいくつかに限定するとか、イオンを入れるかどうか、というような議論が学習指導要領を巡って多くありました。大事なことは、生物の多様性ということを知ることが本質であり、そのためにいくつかの生物の例を挙げることなのであって、例示する生物の種類をいくつかにするかは副次的なことです。どのような見方、考え方が大切かを提示することがリテラシー像として重要と考えます。

誰をターゲットとするか？

それから、今度作成する部会報告書が誰をターゲットとしているか、という疑問が多く部会で提起されました。部会においては、基本的には国民が共有すべき智は何かをきちんと議論し、部会報告書としてまとめて頂きたいと思います。部会報告書は、本プロジェクトに関わる人々が共有できる内容である必要があります。すでに本プロジェクトでは様々な分野、職種の方々に参加して頂いていますので、それらの方々が理解でき、納得できる内容と書き方が求められます。これらの部会報告書の内容は、秋以降「科学技術の智」として最終報告書に統合されていくこととなります。最終報告書においては、2008年以降この「科学技術の智」を定着化させていくことに関わっていく人々、すなわち、

教育関係（学校教育、社会教育、生涯教育等）、報道、出版、行政などの分野の方々に共有され、納得される内容と書き方が求められます。

「将来の日本人成人が持つべき科学技術の智」の「将来」とは？

本プロジェクトが最終的にまとめるものは、将来の日本の成人が持つべき「科学技術の智」の全体像です。その「将来」とはいつのことかと言えば、一応2030年と考えることにしましょう。つまり2030年という時代における成人すべてが共有すべき「科学技術の智」です。2008年に作成された「科学技術の智」は、直ちに定着化の運動のフェーズに移ります。その運動の中で生まれ育つ子どもが成人となるのが2030年です。

どのようにして定着化させるか？

2008年3月にプロジェクト全体の報告書がまとまったところで、来年以降それを定着化させる運動に移って行きます。定着化の方法として、一般向けに噛み砕いた書物やサイエンスカフェなどの広報活動、子どもたち向けの書物や教材の刊行などがあります。また、幼稚園から大学までの教育プログラム、また、社会教育機関の活動のプログラムの開発も進める必要があります。そのような活動を行っている関係機関、個人、グループとの連携を図ります。*

豊かに生きるとは？

20世紀が現代科学を技術に応用することによって物質的豊かさをもたらしましたが、21世紀は安全、安心、信頼の漲る社会を構築しなければなりません。そのためには、人類が智慧を共有して、確かさをもって社会の向くべき方向を決めて行かなければならないのです。そのためには、自然と調和し、自然の威力を巧みに使ってきた先人の智慧を再評価することも重要です。また、我々日本語の豊かな表現力を巧みに用いることによって、科学と技術の本質を伝え、イメージを共有できる可能性もあると思います。すなわち、我々の引きずっている文化、感性、言語、イメージも活用して、科学と技術の智慧を共有できれば、我々の生活は質の高い豊かなものとなると思います。

*本年度国立科学博物館を中心として、科学研究費基盤研究A「科学リテラシーの涵養に資する科学系博物館の教育事業の開発・体系化と理論構築」がスタートしました。また、日本学術会議の人材育成に関するいくつかの委員会でも、「科学技術の智」に関する議論が深められて行きます。また、英国における National Science Center, Royal Society 等の活動も参考となります。